

肝炎から発癌におけるSTAT3シグナルの役割の検討

1993年~2004年に当科にて肝細胞癌の手術を受けた患者さんを対象としています

【はじめに】

全身の様々な細胞内にはSTAT3というシグナル伝達物質があり、細胞の増殖をコントロールしています。正常な細胞では増殖過多とならないよう制御されていますが、癌細胞ではSTAT3の異常活性化が発癌や癌の悪性度に関わっていると考えられています。

【目的】

各種肝炎、肝癌でのSTAT3シグナルの活性化の検討。また、再発を含めた予後との関係の検討を行います。

【研究内容】

当九州大学消化器・総合外科(第二外科)において切除された肝細胞癌の標本を使って、活性化STAT3を同定する染色を行い、これらのたんぱく質の出現の程度を測定します(図1)。この染色の結果と患者さんの背景を比較し、STAT3の異常活性化が果たして肝細胞癌においてどういった影響を持つのか考察します。

【患者さんの個人情報の管理について】

本研究の実施過程及びその結果の公表(学会や論文等)の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

もし対象者となることを希望されない方は、下記連絡先までご連絡下さい。

【研究期間】

平成22年2月5日から平成24年3月31日

【医学上の貢献】

この研究により肝細胞癌における遺伝子発現異常と臨床病理学的因子および予後との関連が示唆されれば、新しい予後因子などが明らかとなり、医学上の貢献はあるものと考えます。

【研究機関・組織】

九州大学大学院 消化器・総合外科(第二外科)

責任者 教授 前原 喜彦
講師 調 憲
助教 武富 紹信
大学院生 間野 洋平

連絡先: 〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel 092-642-5466

大学院生 間野 洋平

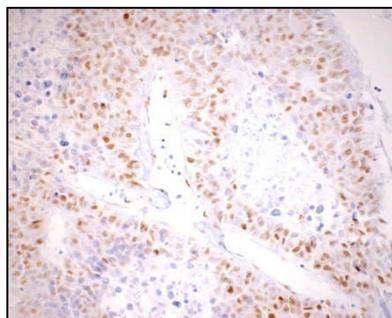


図1. 活性化STAT3の免疫組織化学染色
茶色く染まっている部分に活性化したSTAT3タンパクが存在する